

ヨハネの手紙一におけるパレーシア (παρρησία)

澤 村 雅 史

(2009年11月13日受理)

παρρησία in the 1st Epistle of John

Masashi SAWAMURA

Abstract

παρρησία appears 31times in NT and 13cases are in the Johannine Literature(9times in the Gospel and 4times in the 1st epistle). So that it can be identified as the keyword of Johannine Literature.

In this article, παρρησία in the 1st epistle is argued as representing the realized eschatological character of the 1st epistle.

I. はじめに

「パレーシア」(παρησία) は、新約聖書中に31回の用例が見られるが、そのうち13回がヨハネ文書であり、9回はヨハネ福音書、4回はヨハネの手紙一(以下Iヨハネ)において使用されている。その頻度からみて、ヨハネ文書に特徴的な鍵言葉であると考えることができよう¹。

この語は、ヨハネ福音書では、イエスの言行が「公然と」なされたことを言い表すことばとして用いられ、またIヨハネにおいては、以下に詳述するように、現在と終末に関係する神に対しての「率直」や「確信」を意味する語として用いられている。

本稿ではこの語のIヨハネにおける用例に注目し、その特徴について論ずる。

II. パレーシアの語義

「大胆」「率直」「確信」などを意味するパレーシアは、語源的に「すべてを語る」(πᾶς ῥήσις) ことに由来し、もともとギリシャ世界において、市民権を持った自由人の権利として、公衆の面前で、自由に、意見を表明するデモクラティックな権利すなわち「言論の自由」を指したことばである。後代においては、政治的意味が後退し、個人的・倫理的意味を持つようになり、より個人的な状況における友人同士の率直さを指す言葉として用いられるようになる。とくに、キュニコス派においては、道徳的な側面が強調され、仲間であれ、友人であれ、敵対者であれ、臆することなく誉め、または叱責するという美德として、自由との連関において理解された。さらには、真理の探究をささえる討論の自由として、哲学的・倫理的意義をも持つようになった。

旧約においては、ヨブ記において、神によって得られる「喜び」を指し、詩篇においては神の(裁きにおける)顕現を指す言葉として用いられる。外典・偽典(知恵の書・Iエノク)においては、終末論的文脈での用法が見られる。

また、フィロンは「神に対するパレーシア」を、冒瀆的姿勢としてではなく「神の友」モーセの祈りの姿勢として積極的に評価している²。

III. Iヨハネにおける用例

以下にまずヨハネ第一の手紙における4回の用例を私訳により概観してみたい。ここではひとまずパレーシアを訳出しないこととする。

(1) 2:28 Καὶ νῦν, τεκνία, μένετε ἐν αὐτῷ, ἵνα ἐὰν φανερωθῆ σχώμεν παρησίαν καὶ μὴ αἰσχυνθῶ

μεν ἀπ' αὐτοῦ ἐν τῇ παρουσίᾳ αὐτοῦ.

私訳「そして今や、子たちよ、彼の中に留まれ、彼が現れるときに我々がパレーシアを持つために、そして彼から恥とされることがないために、彼の到来において。」

(2) 3:21 Ἀγαπητοί, ἐὰν ἡ καρδιά μὴ καταγινώσκη, παρησίαν ἔχομεν πρὸς τὸν θεόν

私訳「愛するものたちよ、(我々の) 心が責めることがないのであれば、神に向かってパレーシアを我々は持つ」

(3) 4:17 ἐν τούτῳ τετελείωται ἡ ἀγάπη μεθ' ἡμῶν, ἵνα παρησίαν ἔχωμεν ἐν τῇ ἡμέρᾳ τῆς κρίσεως, ὅτι καθὼς ἐκεῖνός ἐστιν καὶ ἡμεῖς ἐσμεν ἐν τῷ κόσμῳ τούτῳ.

私訳「このことにおいて、愛は我々のうちに完成されている、裁きの日パレーシアを持つために、なぜなら彼があるように、我々もこの世においてあるから」

または「裁きの日パレーシアを持つことにおいて、愛は我々のうちに完成されている、なぜなら彼があるように、我々もこの世においてあるから」

または「彼があるように、我々もこの世においてあることのうちに、愛は我々のうちに完成されている、裁きの日パレーシアを持つために」

(4) 5:14 καὶ αὕτη ἐστὶν ἡ παρησία ἣν ἔχομεν πρὸς αὐτόν ὅτι ἐάν τι αἰτώμεθα κατὰ τὸ θέλημα αὐτοῦ ἀκούει ἡμῶν.

私訳「そしてこれが我々が彼に向かって持つところのパレーシアである、もし我々が彼の意味にそって求めれば、彼は我々を聞いてくださるというのが」

これら四つの例を概観すると、(2)・(4) は明らかに、(1) は (そしておそらく (3) も) 含意として、神に対するパレーシアについて述べている。またとくに、(1)・(3) はそのパレーシアとは終末や審判において持つものであることを示している³。(2)・(4) は (現在の) 祈りにおけるパレーシアである⁴。

本稿では、パレーシアの語が I ヨハネにおいて持つ特徴を明らかにするために、これら四つの箇所の釈義を試みる。

IV. 釈義

ヨハネの手紙一は、ヨハネの教会において、異なる教えを唱導する教師たちが現れ⁵、分派

を形成し、遂には教会から出て行くという危機(2:19)が起こり、教会内に不安や動揺が生まれる中、書かれた手紙である。

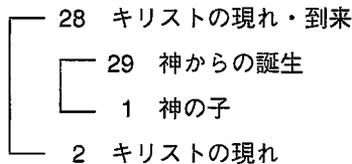
1. 2:28の釈義

(1) テキストの範囲と構成(2:28～3:3)

28節の冒頭のκαὶ νῦν が新しいペリコーペの始まりであることに、幾人かの学者は賛同している⁶。一方で2:18～29をひとつのまとまりと考える学者もいる(スマリー、スミスなど)。ブルトマンは、元來の手紙の終わりは2:27であり、「以下の部分には新しい思想は含まれておらず、1:5～2:27で論じられた主題がもう一度繰り返される」⁷という。しかし、繰り返すということに関して、マーシャルはロウやブルックに例をとり、らせん構成という伝統的な考え方を紹介している⁸。

28節はκαὶ νῦνで新しい段落を始めると同時に、「御子のうちにとどまる」というキーワードで、27節とつながっている。3:2の「愛する者たち」という呼びかけも、新しい段落の始まりを示す語として受け取ることができるが、前後の主題の緊密なつながりゆえに、切れ目というよりは、主題の深化を示す語として受け取るほうがよい。

また、28節から2節にかけて、交差配列的な構造をみてとることもできる⁹。



さらに、人称に注目すると、ヨハネは最初このペリコーペを2人称複数の訓戒ではじめ(2:28・29節)、次に1人称複数によってヨハネと手紙の受信者が神の愛を共有していることを強調し(3:1・2節)、最後に3人称複数への移行によって、訓戒と希望を信仰者全体に開かれたものとして一般化している(3節)と見て取ることができる。

ペリコーペをより広く3:10までとする例もある¹⁰が、以上により、ここでは3節までと考えたい。

(2) 釈義

2:28

καὶ νῦν 前述のように、新しい段落の始まりを示す語であるが、ヨハネの訓戒の緊急性を示

すことばとして受け取ることもできる¹¹。*τεκνία* は著者から読者への親しい呼びかけ。

μένετε ἐν αὐτῷ 「キリストを共同体とその生の諸相全体が引き込まれていく空間（的表象）として表している」¹²。27節では教えにとどまることとして導入された表現（「教えられたとおり」）が、ここでは教えの実践（cf. 29節）へと推し進められている。とどまるとは、すでにその内にあるということを意味する。新しい教えに惑わされず、はじめの教えにとどまることの必要十分性が訴えられている¹³。また新しい教えに飛びつく前に、はじめの教えを実践することに大きな余地が残されていることを思い起こさせている。

*ἐὰν*以下は条件節ではなく、時をあらわす副詞節。キリストが現れることは当然に前提とされているからである。

φανερωθῆ (*φανερῶ*) 新約聖書における用例49回中、ヨハネ福音書に9回、ヨハネの手紙一に9回と、ヨハネ文書の頻出語である。ヨハネの手紙一中、1:2（2回）、3:5、3:8では過去におけるキリストの到来、本ペリコーペ中の2:28と3:2の2回中1回では、将来におけるキリストの到来を示す¹⁴。過去において、キリストが肉体をともなって現れたこと、未来においてふたたび体をもって現れることを言い表すのであろう。すなわち、仮現論的な論敵への反駁のことばとして用いられていると考えられる。

παρησίαν ヨハネ福音書ではイエスの「公然たる（18・20）またははっきりとした（16・29）語りに集中されている」¹⁵が、書簡での4例においては一貫して「我々」（すなわち信仰者たち）が「持つ」姿勢のことである。ここでは、パレーシアとパルーシアの掛詞によって、キリストの来臨時に確信（勇気・大胆さ）が与えられることが印象付けられている（クラウク¹⁶によればこの掛詞は終わりの出来事＝キリストの来臨の「キリスト論的次元」と「人間論的次元」との「密接な関係性を認識させるため」であるという）。本ペリコーペにおいて、キリストの現われ（すなわち終末）における*παρησία*は、（現在における）キリストとの正しく・近い関係すなわち*μένειν ἐν αὐτῷ*（彼のうちにとどまること）によって得られるのである。

αἰσχυνθῶμεν ここではイエスの顕現（*φανερῶ*）＝来臨（*παρουσία*）における信仰者の状態として*σχωῶμεν παρησίαν*に対置されている。イエスの前で自らを恥じるのか（cf.ルカ5:8）、またはイエスによって恥とされるのか（cf.マルコ8:38）、二通りの解釈があるが、ここでは前者をとる。*παρησία*との対比から自然に導き出される解釈だからである¹⁷。

παρουσία ここでは「現れる」（*φανερωθῆ*）と対になって、キリストの終末論的来臨を言い表している。新約聖書に24回使用されるうち、ヨハネにおける唯一の用例である¹⁸。原義は「存在」。ヘレニズム世界では、王や皇帝など、特別な地位にある人物の来訪を示すことば。新約聖書中、「到着」を表すことばとして用いられているケースも多いが、イエスの「到来」を意味する神学的用語である。注意すべきは、「再臨」という表現は聖書中にはなく、ユスティノスの「第

一弁明」にはじめて登場する用語であるということ。すなわち、ヨハネにとって、パルーシアは完全に未来の次元の出来事ではなく、動的な概念であり、現在の次元をも視野に含んでいる¹⁹。

2:29

ἐὰν εἰδῆτε ὅτι δίκαιός ἐστιν 当然に「知っている」ことが前提とされている、修辞法である。ここで、「彼が義である」(δίκαιός ἐστιν)、「彼から」(ἐξ αὐτοῦ)における「彼」とは、神を指すのか、キリストを指すのか。ブルトマンは「イエスから生まれるという考えは不可能である」²⁰と言い切る。新共同訳聖書は「御子」「神」と訳し分けている。しかし、28節と29節の間で、主語の交代がおこるのは不自然ではある。スマリーによればあいまいさは故意に残されているのであり、キリストを通して神から再び生まれることが示唆されているという²¹。

γινώσκετε ὅτι.....γενένηται 「霊的な再誕生というイメージはまったくヨハネ的である」²²。ヨハネの手紙一にも、5回(3:9, 4:7, 5:1, 4, 18)登場する概念であり、ヨハネ福音書にも2回(1:12-13, 3:3-8)登場する。神から(再び、キリストによって)生まれることによってこそ、信仰者は神との適切な関係に入りうるのであり、人間存在の始原と終局は究極的には神であり、すなわち霊的であり、物質的ではないのである²³。「知る」とは単に知識的・思索的なことからではなく、本質に対する洞察を意味する。その点、ヨハネのグノーシスの傾向との用語的接近がここにも見られる。義を行うとは、「キリストのうちにある」ことの現実化である。そして、義であるキリストと義を行うものの等質性は、3:2のὁμοιοίを準備している。

3:1

ἀγάπην δέδωκεν 「愛する」(ἀγαπεῖν) よりも強調された表現²⁴であり、完了形という語形、またποτατήνという修飾語とともに、神の愛の完全性と無二性を表現している。

τέκνα θεοῦ 神から生まれたものは、すなわち神の子である。神の愛は、信仰者が神の子と呼ばれ(κληθῶμεν)、またそれが事実化されている(καὶ ἐσμὲν)ことに帰結する。ヨハネは神からの誕生→父→神の子と呼ばれる→神の子である、と、信仰者の恵みの現状に焦点を絞り込む。その描写の中心点には神の愛がおかれている(図1を参照)。ヨハネはυἱόςをキリスト、τέκναを信仰者に使い分け、υἱόςはキリストだけに与えられる特別な称号としている²⁵。

διὰ τοῦτο ὁ κόσμος οὐ γινώσκει ἡμᾶς, ὅτι οὐκ ἔγνω αὐτόν ここでも「知る」という動機が再び導入されている。世は神²⁶を「知らない」から、信仰者を「知らない」。すなわち、神の子としての本質とそこから導き出されるふるまいとを理解できない。相容れない²⁷。世間一般の知識や経験に基づく価値観や行動様式と、神の愛、すなわち神の子とされていることに基づく

価値観・倫理観や行動様式とは、まったく異なるものになるはずである。しかし、ヨハネは世から分かれた宗教的エリートを標榜するのではない。むしろそのような二元論を神の愛という動機により克服している。神の子は義であり、義の行いをすべきであり、自らを清めるべきであるが、それを可能ならしめるのは、神の愛にほかならないのである。

3:2

νῦν τέκνα θεοῦ ἐσμεν, καὶ οὐπω ἐφανερώθη τί ἐσμεθα 「神の子である」ことは、ここでさらに終末論的次元に拡張されており、2:28と共通する「今や」(νῦν)は「未だ」(οὐπω)との、ヨハネ文書の特徴でもある終末論的緊張を導入するキーワードとして機能している²⁸。信仰者の終末における状態とキリストの顕現はφανερώωというキーワードによっても関連付けられている。キリストが現されるまでは、信仰者がどのようになるのか、その状態ははまだ示されていない(現されていない)のであるが。

ἐὰν は2:28と同様、ここでもキリストの到来への確信にささえられた、時の副詞節。

ὅμοιοι キリストの顕現において、信仰者の神の子性は全うされる。それは、キリストの似姿において、である。シュトレッカー (p89) は、αὐτῷを「神」ととり、創世記1:26への言及 εἰκῶν καὶ ὁμοίωσιςを見出しているが、神からの誕生という概念を考え合わせるならば、興味深い指摘である。

ὅτι ὁψόμεθα αὐτὸν καθὼς ἐστίν ここで「知る」ことが「見る」ことへと置き換えられる。「見る」もまた、あえてグノーシスの語彙の援用か。または旧約的背景に由来するものか。コリント一13:12他に類似の表現が見られる。ヨハネ文書においては、福音書17:24のイエスの告別説教の中の祈りに、イエスの栄光を「見る」ことが言われている。3節とのκαθὼςの共有により、キリストの清さを見るということが暗示されていると同時に、終末にキリストと出会うことを現在化して生きることが勧められている。

3:3

3節は、「平叙文の形をとってはいるが、訓戒的な言い回し」²⁹である。

ἐλπίς はヨハネ文書では唯一の用例。パルーシア→御子を見る→御子に似たものとなる、という神の子性が全うされるという希望。「現在と将来における信仰者たちの立場の調停役」³⁰

ἀγνίζει ἑαυτὸν, καθὼς ἐκεῖνος ἀγνός ἐστίν ἐκεῖνοςはヨハネ文書でイエス・キリストを指す代名詞として使用される³¹。ἀγνίζειν / ἀγνόςは、類義語のκαθαρόςと対比した場合、前者は「感覚」、後者は「状態」を表すという³²。ここでは、当然祭儀的な意味ではなく、倫理的な意味であり、「罪から自由に身を保つ」³³ことであり、義を行うこと(29節)、終末的確信(28節)を

現在のものとする、すなわち神の子として生きることを指す。

以上の釈義を通して明らかなことは、このペリコーペにおいて、現在の次元と終末の次元とが結び合わされているということである。パレーシアとパルーシアの掛詞や、いくつかのモチーフにおける対比を通して、パレーシアが終末時に神の前で持つものであることが示されると同時に、現在の次元と終末の次元との結びつきが明らかにされることによって、このパレーシアは終末時のパレーシアを基礎として、現在の時点で（人々の前で）持つべきものであることが示されているのではないか。ヨハネのここでの主張は終末における希望を現在化して生きることであり、それは「御子のうちにとどまる」ことであり、「義を行う」ことである。

また、もう一点注目すべきことは、「恥」との対比である。ここではパレーシアの反対の状態は「恥」なのである。

2. 3:21の釈義

(1) テキストの範囲と構成 (3:18～24)

クラウクは3:20aと21aにおける「責めている／いない心」という対比によって構成された対句が3:18～22というペリコーペの中心をなしていると述べている³⁴。ドッドはペリコーペを19節から24節に区切るが³⁵、「これによって」(ἐν τούτῳ)という特徴的な表現は、この文脈においては先行する内容を指すと考えるほうが自然ではないか³⁶。

なお、クラウク³⁷は18節のアレーセイア (ἀληθεία) は単なる副詞的意味ではなく真理概念と関連していると指摘し、18節と19節には「真実・真理」概念におけるつながりがあると主張している³⁸。

さらに、18節の「子たちよ」(Τεκνία) という呼びかけも新しい段落のはじまりを示すと考えられる。

また、22節の「掬」を23節以下が詳述していることから、24節までをペリコーペの範囲とするのが妥当ではないか。

(2) 釈義

19節と20節のつながり、とくに20節の二つのὅτι句の関連については釈義上の困難があることが指摘されており、2番目のὅτι句の読み替えや削除（アレキサンドリア写本ほか少数の写本に根拠を有する）、あるいは2番目のὅτι句の前にοἶδαμεν（我々は知っている）を挿入するなどの解決が試みられてきた³⁹。しかし、どのような解決をとっても「神の偉大さによって一切の自己審判が除去されている」⁴⁰ことの安心が述べられていることには変わりないであろう。

19節の「彼（神）の前で」（ἐμπροσθεν αὐτοῦ）は終末の審判をも思わせるが、ここでは「審きの過程が終わりの時点から解放され、現在へと移され」⁴¹ている。「安心するであろう」（πείσομεν）も未来形であるが、「現在に向けられている」⁴²。

同様に21節の「パレーシアを神に向かって我々は持つ」（παρησίαν ἔχομεν πρὸς τὸν θεόν）も「心が自己審判から解放された者に与えられる現在の可能性」⁴³を示している。

ここで「我々の心が責める／責めない」ことを軸として構成されている3：20と21の対句に注目すると、「心に責めがある場合→神の前での安心」／「責めがない場合→神の前でのパレーシア」という二つのケースが対比されている。

前者のケースでは、「神がすべてをご存知である」→「われわれが真理から出たものである」（ことを神がご存知である）→（それは）「我々は言葉や口先で愛するのではなく、行いと真実において」（真理から出たものである）という連関が「安心」の根拠となっている⁴⁴。

後者のケースでは、「パレーシア」とは、無条件に⁴⁵「願いがかなえられる」（αἰτῶμεν λαμβάνομεν＝「求めているものを受け取る」）という「確信」である（または5：14の釈義において後述するように、祈りにおける確信に基づく「率直さ」）。その願いの内容とは、戒めを守るといふこと、すなわち愛を行うということである⁴⁶。

それゆえ安心とパレーシアは「愛の行い」という点で一致することになる。すなわち、現在における「愛の行い」が、現在における神の前での安心となり、神に対するパレーシアとなるのである⁴⁷。安心とパレーシアは、ここではほぼ同義と見なすことさえできるのではないか。

3. 4：17の釈義

(1) テキストの範囲と構成（4：17～18）

4章7節から21節までを一つの単元と見なすことについて、多くの学者は一致しているが、それをさらに細分化するにあたり、シュナイダー⁴⁸は16bを新しい段落のはじまりとし、そこから21節までを一つのペリコーペとしている。また、新共同訳聖書は17節のἐν τούτῳを「こうして」と訳し、16節bとの間に結びつきを見出している。

対して、クラウクは13～16節のまとまりを重視し、ἐν τούτῳは後続の部分の指すと考え、そして17節aと18節dとが対比をなしていると考え、17節～18節を一つのまとまりとみなす⁴⁹。ブルトマンも4：17～18を一つのまとまりと見なしている⁵⁰。

(2) 釈義

ここではパレーシアは、「愛の」⁵¹または「（イエスのうちに）とどまり続けたこと」⁵²に対する「果実」である。

17節aの、現在すでに「愛がわたしたちの内に全うされている」ことと、17節bの将来の「裁きの日」との間には終末論的な緊張関係が存在する。

パレーシアは、現在あるいは将来のどちらに属するのか。それは第一義的には「裁きの日」すなわち将来である。しかし、クラウクラが主張するようにἐν τούτῳを後ろにかける読みを採用することでより一層明らかになるように、終末におけるパレーシアは現在における愛の完成と緊密に結びついている。すなわち、現在における愛の完成とは終末におけるパレーシアを現在において持つことのうちにあるのではないか。

18節a・bでは愛と恐れが対比されている。そしてさらに、「愛の完成」というモチーフを介して「恐れ」はパレーシアと対比される。

4. 5:14の釈義

(1) テキストの範囲と構成 (5:14～15)

5:13～21はこの手紙の結びである。クラウクはこの範囲をとりながらも、5:13が本来の結びである可能性について述べている⁵³。ブルトマンは5:14～21を付論としている。このうち、パレーシアを含むより小さい単位をとりだすならば5:14～15となる。5:14～15は16以下の論述の準備のため、祈りが聞き入れられる確信について3:21以下のモチーフを下敷きにして再度述べようとしている⁵⁴。

(2) 釈義

このペリコーペにおけるパレーシアは、願い求めたことはすでに実現しているという確信である。またはその実現を確信して神に語りかける自由な率直さである⁵⁵。この確信はまったく現時的である。この箇所および3:21のパレーシアは、終わりの日におけるキリストのパレーシアと神の裁きに際して持つものではなく、現在に属するものである⁵⁶。この確信の根拠は、3:21～22と同様に、願い求めが「彼(神)の意志に沿って」(κατὰ τὸ θέλημα αὐτοῦ) いることにある。

V. 結論～現在化された終末的パレーシア

これら釈義を総合することによって明らかになるIヨハネにおけるパレーシアの特徴を、以下のとおりにまとめたい。

- (1) 「キリストのうちにとどまる」ことによって得られるものである。
- (2) 「神の掟を守る」こと＝「愛を行う」こと、という神の意に沿った願いが(現在において)

実現することへの「確信」。あるいはその確信を抱いて祈る「率直さ」。

- (3) 「恥」と反対の状態である。
- (4) 「怖れ」と反対の状態である。
- (5) 「安心」と内容において一致する。
- (6) 終末（裁きの日・キリストの現われ）において持つものであり、また現在持つものである。それらは終末論的に結びついている。

すなわちパレーシアとは、

- (1) 神の前で終末の裁きの日に恥じず恐れずにあることのできる率直さであり、それはイエスのうちにとどまり続けること（=義を行うこと=神の掟を守ること=愛の実践）の果実である。
- (2) そのようなパレーシアが終末時に神の前で与えられる希望によって、信仰者は現在においても神の前で、また人々の前で、そのパレーシアをすでに持ちうるのである。
- (3) その意味で、パレーシアは、Iヨハネにおける現在と終末の結びつきを象徴する鍵語である。

参考文献

- 松永希久夫「ヨハネの手紙一」『新共同訳 新約聖書註解II』、日本基督教団出版局、1996年¹
- ハワード・マーシャル著・中村保夫訳『ヨハネの手紙』、聖恵授産所出版部、1993年
- ルドルフ・ブルトマン著・川端純四郎訳『ヨハネの手紙』、日本基督教団出版局、1987年
- ドワイト・M・スミス著・新免貢訳『ヨハネの手紙1、2、3』、日本基督教団出版局、1994年
- Stephen S. Smalley, *J. 1, 2, 3, John*, Waco, TX, 1984
- Georg Strecker, tr. by Linda M. Maloney, *The Johannine letters : a commentary on 1, 2, and 3 John*, Minneapolis, 1996
- A. E. Brooke, *A critical and exegetical commentary on the Johannine Epistles*, Edinburgh, 1948
- 土井健二「パレーシア：『自由に語ること』：ニュッサのグレゴリオスにおけるその転換」、『神學研究44』、関西学院大学神学研究會、1997年
- ハンス・J・クラウク著・住谷眞訳『EKK新約聖書註解 ヨハネの第一の手紙』、教文館、2008年
- ヨハネス・シュナイダー著・松本武三訳『ヨハネの第一の手紙』、ATD・NTD聖書註解刊行會、1988年

注

¹ 本稿では、ヨハネ文書に用語や概念の統一性が見られることは、同じ系統の教会（教団）において書かれたことを示しているが、福音書と手紙の著者は異なるという立場をとる（参照 松永・p444およびクラウク・p 59以下）。パレーシアが鍵語であることについてはクラウク・p 245。

- ² 以上、παρηγοίαの語義および動機史については、シュトレッカー・p80およびスマリー・p130、土井・p 79-102 参照。
- ³ 「《確信を持つ》という表現は二・二八、三・二一にも用いられ、いずれも終末の審判と関係している」(松永・p459)
- ⁴ “This is the fourth mention of the Christian’s confidence; we have it twice in relation to the Judgemnet(ii 28, iv 17), and twice in relation to prayer(iii 21, and here).” (Brooke, p143)
- ⁵ マーシャル・p48。松永・p444によれば巡回教師か。前グノーシス的二元論者・仮現論者。彼らの教えがどの程度“異端的”であったのかについては、その内容を再構成することの困難さゆえに、言うことができない。ブルトマンは、「神からの誕生」という主題はグノーシス的思想圏に由来するとして、「キリスト教的宣教とグノーシスの敬虔の親近性は、見過ごすことができない」としながらも、「終末論的出来事が(現在のであって同時に将来的なものとして)一つの歴史的出来事に、つまりイエスの来臨に根拠を持っているという逆説」を「キリスト教的告知」は主張し、グノーシスは逆にイエスの来臨を否定するところに決定的な相違があるという(ブルトマン・p66～67)。
- ⁶ スマリー・p128
- ⁷ ブルトマン・p62
- ⁸ マーシャル・p60。ただし、マーシャル自身はこのような分析に対して「人工的」として批判的である。
- ⁹ スマリー・p140
- ¹⁰ クラウク・p 240は、φανεροῦν(現れる)が2:28bと3:2beに共通していることと、2:29eの「神からの出生」と3:1～2における「神のこどもたること」のモチーフ的類似によって2:28～29と3:1～3とを結び付けるが、「同様な観察によりまた、終止符は早くも3:3に打たれるのではなく、3:10に初めて打たれるという結論になる」と主張する。
- ¹¹ シュトレッカー・p79。また、スマリー、前掲書、p129は18節によって導入された「終わりの時」の緊急性を28節にも見ている。
- ¹² シュトレッカー・p129
- ¹³ スミス・p127
- ¹⁴ ほかに2:19では反対者が明らかになること、4:9では「神の愛がわたしたちのうちに示された」ことを言い表す。
- ¹⁵ クラウク・p 245
- ¹⁶ クラウク・p 244
- ¹⁷ スマリー・p131は両義性を指摘しつつ、後者を妥当としている。ブルック・p66は前者をとる。
- ¹⁸ クラウク・p 244
- ¹⁹ スマリー・p132.
- ²⁰ ブルトマン・p65
- ²¹ スマリー・p133.
- ²² スマリー・p134
- ²³ スマリー・p134
- ²⁴ 新約聖書中、唯一の用例である(ブルック・p80)。
- ²⁵ スマリー・p141。さらに、クラウク・p 253によればτεκνία(cf.28節)という指小形は「キリスト教的な尊称」であるという。
- ²⁶ ここでも世が知らない「彼」は神かキリストかという議論が生じうる。スマリー・p142に習い、両義的に解釈することが、ヨハネの主張により近いと考える。
- ²⁷ シュトレッカー・p87は、ここにヨハネ福音書におけるイエスと世との対立との対応を見る。
- ²⁸ スマリー・p145
- ²⁹ ブルトマン・p70
- ³⁰ クラウク・p 251

- ³¹ プルトマン・p70
- ³² スマリー・p150
- 33 プルトマン・p70
- 34 クラウク・p 307
- 35 ドッド・p87
- 36 ブルック (p 100) は、先行する内容を指示するのは著者の文体に反すると指摘している。確かに、ἐν τούτῳ ὅτι (またはἵνα) という構文においてἐν τούτῳの内容がὅτι (またはἵνα) 以下を指すのはヨハネに特徴的な文体である。しかし I ヨハネにおいても、3 : 9や5 : 2 (あるいは4 : 17も) のように、ἐν τούτῳが先行する内容を指示している例がある。
- ³⁷ クラウク・p 307
- ³⁸ ただしプルトマン (p 176) は前者を単なる現実、後者を神の現実として区別している。
- ³⁹ クラウク・p 306、プルトマン・p 81
- ⁴⁰ プルトマン・p 83
- ⁴¹ クラウク・p 310
- ⁴² クラウク・p 310
- ⁴³ プルトマン・p 83、傍線筆者。
- ⁴⁴ 「神の偉大さは神がすべてをご存知だということにあるというのは、(中略) わたしたちが根本においては愛しあっている者であり (14節)、そのような者として『真理から出た』者 (19節) であることを、神はご存知だという意味にほかならない」(プルトマン・p 83)
- ⁴⁵ クラウク・p 316
- ⁴⁶ クラウク・p 468
- ⁴⁷ 「確信に満ちた率直さが、告発する心に直面していても、すでに神の前でのかれらの現在におけるあり方を規定している」(クラウク・p 467)
- ⁴⁸ シュナイダー・p 379
- ⁴⁹ クラウク・p 352・p 388。ἐν τούτῳについては注36も参照。
- ⁵⁰ プルトマン・p 101
- ⁵¹ プルトマン・p 101
- ⁵² クラウク・p 389
- ⁵³ クラウク・p 460
- ⁵⁴ プルトマン・p 117
- ⁵⁵ ブルック・p 143
- ⁵⁶ クラウク・p 467